様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5 月 25 日現在

機関番号：16301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520354
研究課題名（和文）：　ドイツ語における動詞範疇について
研究課題名（英文）：　About the verbal categories in German
研究代表者　：　野上　さなみ（NOGAMI　SANAMI）
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：　80325828

研究成果の概要（和文）：
①アスペクト概念が文法範疇として確立している言語においては、完了・不完了アスペクトの相違を積極的に表現することが可能である。例えば英語では、「be+動詞の現在分詞」という形式が確立しており、それによって不完了アスペクトの一種である「出来事の進行性」を積極的に表現することが可能である。英語のような言語とは異なり、アスペクトが文法範疇として確立しておらず、進行形という形式も確立していないドイツ語で、出来事の進行性の概念がどのような手段を用いて表現される得るのか、さらにその表現手段と分布を英語とドイツ語の比較対照によって示すことができた。

②個々の動詞に含まれる語彙概念と動詞範疇の関連を調査し、ドイツ語とフランス語において特定の語彙概念（状態変化）が複合時制形式の助動詞選択にどのような影響を及ぼすのかを示すことができた。さらに両言語において、場所の移動を表す自動詞の複合時制を作る際に、方向規定の語彙概念が助動詞選択に及ぼす影響範囲や度合いの相違を示した。

研究成果の概要（英文）：
① In the languages, in which the concept of “aspect” is as a verbal grammatical category established, one can express positively the difference between the perfective and imperfective aspect. For example in English, we can use the grammatical form *be+-ing* , to express the progressivity of verbal event, one kind of imperfective aspect, positively. I could show, which expressions in German language should be chosen for the notion of “progressivity” and the distribution of these expressions, with the method of comparing English and German. In German, neither the notion of “aspect” as a grammatical category nor the progressive form is not established.

② I researched the relation between lexical concepts in each verb and verbal category (tense and aspect). I could show the influence of one lexical concept “*change of state*” on the selection of auxiliary verbs for analytic temporal forms like perfect of intransitive verbs. Both in French and German language, we can see the alternation of auxiliary verbs for the analytic temporal forms. In these two languages however, the degree of the influence of the lexical concept “*direction of movement*” is different from the each other.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：　言語学
科研費の分科・細目：　言語学・言語学
キーワード：　動詞範疇、アスペクト、語彙概念、意味論、対照言語学、言語類型学

1．研究開始当初の背景

BHAT（1999：The prominence of tense, aspect and mood・Amsterdam/Philadelphia）は、複数の動詞範疇のうちどの範疇に重点を置いて言語形式が構築されるのかによって、言語を次の 3 つのタイプに分類することを試みている：

① Aspect-prominent languages
② Mood-prominent language
③ Tense-prominent languages

本研究でまず着目したのは Aspect（アスペクト：相）という動詞範疇である。

現代ドイツ語には独立した進行形を表現する形式は存在しながらも、それが体系的に確立し、相当な頻度で使用されているとは言い難い。それどころか、こういう形式そのものを持つにもかかわらず、進行形を使用するかどうかに関する話者の選択が「義務づけ」られていない。現代ドイツ語において Aspect の概念は、副詞句や状態受動形や結果相構造といった別の動詞範疇に依存する形で非体系的に、つまり文法的にはさまざまな手段に分布する形で表現される結果となっている。

このため、現代ドイツ語はアスペクトという概念を直接表現するタイプの言語には分類されず、対照言語学や言語類型学の分野では、アスペクトという動詞範疇が言語形式のレヴェルで体系的に整っていないタイプの言語として位置づけられている。

BHAT の分類に従う場合、現代ドイツ語がどのグループに属するのかについては、現段階では①の Aspect-prominent languages には分類され得ない、としか断言できない。しかし、LEISS (1992: Die Verbalkategorien des Deutschen・Berlin /New York) によれば、時制・法・アスペクト・態といった動詞範疇のうち、基本となる概念はアスペクトで、言語の通時的変遷の過程で特定の言語形式の解釈が変換される場合、解釈の出発点となるのがアスペクトという範疇である、とされている。それ故に、形式が在るにも関わらず、その使用が確立していないドイツ語におけるアスペクトの概念は大変興味深いものであると言える。

このような現代ドイツ語の現状に対して、アスペクトが文法範疇として確立していることで有名な、ロシア語などのスラヴ系言語やフランス語・スペイン語といったロマンス語系言語では、完了相・不完了相という 2 つのアスペクト形式のいずれを使用するのかを話者が決定することが、文法的にいわば『義務付けられている』ということができる。さらに、ロシア語においては、アスペクトという概念以外にも、特に運動の動詞を定動詞・不定動詞に 2 分類するという基準がある。具体的には、同一の運動に「反復性」や「往復」の概念が含まれるか否か、また運動のあり方（公園内を方向とは無関係に任意に散歩するのか、それとも一定の方向に向けて公園を横切るのか、といった区別）が判断基準として機能し、この運動の動詞の 2 分類が行われる。

ドイツ語の運動の動詞にはこのような分類は適用されない。けれども、『反復性』に関して言うならば、運動の動詞に限らず複数の動詞範疇に非体系的な形で表出していることを本申請者は確認している。これは、平成 16 年～18 年度の科学研究費補助金・若手研究 B による研究課題『ドイツ語の動詞範疇と項の典型的主体性・客体性の関係について』（課題番号 16729011）に従事し、その研究成果として得られた結果であることをここに明記しておく。具体的には、「接頭辞 *be-*

の付加」や、「非人称受動態」の用法の一部がこれに該当する。特に「接頭辞 *be-*」を自動詞に付加する場合には、基本動詞の項の典型的主体性の強さが意味論的条件として機能していることをつきとめることができた。

また、平成 11-12 年度の科学研究費補助金・特別研究員奨励費による研究課題『現代ドイツ語の結果相構造について—日本語の結果相構造との対照研究—』および、平成 13-14 年度の科学研究費補助金・若手研究による研究課題『ドイツ語の動詞表現における出来事の認知と概念化について—日本語との対照研究—』に従事し、アスペクトと時制という二つの範疇が重複して現れる『結果相構造（Resultativkonstruktion）』に焦点を当てた研究を行い、この構造の解釈の決定にも、項の備える典型的主体性・客体性という意味論的な特性が大きな影響を及ぼすことを明らかにすることができた。平成 12 年度までの研究成果は、著書　としてドイツにて出版することができた : NOGAMI（2000Resultativ-konstruktionen im Deutschen und Japanischen・Peter Lang 社）。

このように 2007 年度までの研究プロセスにおいて次第に絞りこまれてきた結果として、本研究課題に至った。

2. 研究の目的

今回申請した研究テーマでは、前節で述べたこれらの過去の研究結果を踏まえ、現代ドイツ語において様々な文法範疇や言語形式のなかに分散した形で表現されているアスペクトや反復性の概念をできるだけ数多く抽出し、それを体系的かつ明確に示すこと、更には、現存する進行形の使用頻度が低くなっている原因があるはずなので、その原因を明らかにすることを目的とし、これらの経緯を総括して、研究期間内に明らかにしたい事柄を具体的に以下の 4 点に集約する形で研究を開始した：

【1】現代ドイツ語において、進行形に相当する形式の利用が義務づけられる確立の高い統語的・意味論的状況はどのようなものであるのかを明らかにすること。

【2】逆に、スラヴ語やロマンス語では進行形を使用するのが妥当だと考えられる出来事の叙述において、現代ドイツ語では進行形の使用を抑制・制限する統語的・意味論的条件がどのようなものであるのかを示すこと。

【3】この現存する進行形の使用頻度を下げている、つまり利用を妨げている要因が何であるのかをつきとめること。

【4】現代ドイツ語において様々な文法範疇や言語形式のなかに分散した形で表現されているアスペクトや反復性、進行性などの概念をできるだけ数多く抽出し、それを体系的かつ明確に示すこと。

3. 研究の方法

現代ドイツ語のアスペクトに関連する形式についての研究は、他のゲルマン諸語と関連付ける形で共時的な研究が数多く行われてきている。本研究では、ゲルマン諸語よりもむしろ、アスペクトが文法範疇として確立している度合いのより強いスラヴ語やロマンス語との対照研究の形を取ることにした。もちろん、語族の異なる複数の言語を比較対照するという方法論による研究は数多く行われてきているが、aspectの分野に関して特に焦点を当てた異なる語族間の対照研究はまだ珍しく、Aspect-prominent languages と言える複数の言語と『非Aspect-prominent languages』の1つであるドイツ語との対照により、狙っている結論を従来の研究に比べてより鮮明に浮き上がらせることを狙った。

研究計画としては、まず初年度を本研究に必要な、ドイツ語の進行形・ロマンス系言語・スラヴ系言語など各分野の基本的文献の読み込みを集中的に行う時期にあて、研究全体の枠組みを決定する作業を行う時期とした。それと平行して、特にドイツ語の進行形が利用されやすい、あるいは利用されにくい意味論的・統語論的条件を確定するために必要な情報を収集するためのアンケートやインフォーマント・チェックの準備を行うこととした。さらに、夏期休業期間などを利用する形で数週間単位でドイツ語圏に直接赴き、後に必要となる資料やデータの収集、インフォーマントチェック、などを実施することを計画した。

研究期間終了後に振り返ってみると、（1）ドイツ語と英語、(2）ドイツ語とフランス語という 2 つの比較対照研究によって、それぞれ結果を論文として発表するにいたった。

（1）では、まず英語をオリジナルとする現代の小説作品において、進行形式で表現されている表現を収集した。続いて、英語テクスト中の個々の進行形式がドイツ語に翻

訳された箇所において、どのような表現形式が選択されているのかをすべてピックアップした上で、その表現の分布状況をまとめ、現代ドイツ語において「出来事の進行性」を積極的に表現する可能性を探った。

（2）においてはまず、フランス語・ドイツ語ともに、複合時制を作る際に、過去分詞として現れる動詞の意味論的な性質によって時制形式で用いる助動詞が、BE 系統の動詞と HAVE 系統の動詞の間で選択されるシステムになっている、という共通点に着目した。しかし、助動詞選択の基準は両言語において異なっており、ドイツ語では BE 系統の動詞が選択されるようなシチュエーションであっても、フランス語では HAVE 系統の動詞が選択される、といった食い違い現象が確認できる。この両言語における食い違いを詳しく調査することで、助動詞選択の基準にどのような相違点があるのかを明示することを目指し、研究を進めた。

4. 研究成果

研究初年度には、英語の進行形で表現される不完了アスペクトの概念をドイツ語で表現する際に用いられる手段とその分布を英独語の比較対照によって示すことができ、その結果は論文「ドイツ語における不完了アスペクトについて」として発表することができた。英語の進行形によって表現される出来事がドイツ語に翻訳される場合、ドイツ語において選択される表現方法はいくつかのグループに集約される。使用頻度の高い方法として、次のような表現方法を挙げることができる：

① 同時性を示す副詞を利用する（約 46%）
② *sein* や *haben* と副詞句を組み合わせる（約 17%）
③ 法（Mood）や時制（Tempus）などの別の動詞範疇を利用する （約 25%）

さらに、研究を進めるにあたり、個々の動詞の語彙に含まれる意味論的特性が、アスペクチュアルな性質も含んでいる文法範疇「時制」その中でも特に「複合時制形式」に与える影響を考慮する必要があると判断して、動詞の語彙概念が自動詞の複合時制を作る際の助動詞選択にどのような影響を及ぼすのかをフランス語とドイツ語の対照によって調査した。この結果をまとめた論文が「ドイツ語とフランス語における複合時制の助動詞選択について」である。

状態変化を表す自動詞の大部分について、ドイツ語では助動詞として *sein*（BE 系統の動詞）が用いられ、*haben*（HAVE 系統の動詞）の利用は認められないのに対し、フランス語では逆に、*avoir*（HAVE 系統）が助動詞として用いられるのが普通であり、*etre*（BE 系統）が用いられるのは状態を直接叙述する場合に限る、という相違を確認することができた。また、方向規定の概念が助動詞の選択に影響を及ぼす条件として、ドイツ語では動詞句のレヴェルにこの概念が含まれていればよいけれども、フランス語では動詞そのものの語彙レヴェルにこの概念がふくまれていなければならない、という相違も示すことができた。

4 年間の研究によるこれらの成果を受けて、今後の研究の展望や課題が定まっていった。まず、動詞を構成する語彙概念とそれが文法範疇に及ぼす影響をより体系的に示すことが必要であると考え、ドイツ語の動詞の語彙化の特色および語彙概念が動詞範疇に及ぼす影響を明らかにすることを、研究の次段階の課題に据えた。平成 22 年度にはその第 1 ステップとして、ドイツ語における「『進行運動』を表す自動詞」の語彙化の特徴の調査を開始した。動詞内部に語彙化される諸概念と動詞の文法範疇の関連の在り方を他言語と対照することによって、ドイツ語の動詞（および動詞範疇）の特質をより詳細に示すことを狙っている。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 2 件）

①「ドイツ語とフランス語における複合時制の助動詞選択について」

・野上さなみ単著
・機関誌「ニダバ」第 39 号 p.21-30
・査読あり
・平成 22 年/2010 年 3 月発行

②「ドイツ語における不完了アスペクトについて」

・野上さなみ単著
・機関誌「ニダバ」第 37 号 p.96-105
・査読あり
・平成 20 年/2008 年 3 月発行

6. 研究組織

(1) 研究代表者
野上 さなみ（NOGAMI SANAMI）
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：80325828